

逆軍の旗

藤沢周平





文春文庫

192—11

逆 軍 の 旗

定価はカバーに
表示してあります

1985年3月25日 第1刷

著 者 藤沢周平

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本はお手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4 16 719211 X

又春文庫

逆 軍 の 旗

藤沢周平



逆軍の旗

目次

逆軍の旗

七

上意改まる

七

二人の失踪人

一四

幻にあらす

一八

あとかき

二六

逆軍の旗

一

惟任日向守光秀は、たびたび中座した。そのため連歌はなかなか始まらなかった。

その夜の光秀の落ち着かないそぶりは、光秀の人柄を熟知している連歌師紹巴じょうはの眼に、異様に映っている。紹巴は、光秀が備中路で毛利と対陣している羽柴筑前守秀吉を援護するため、二、三日中に出陣することを知っていた。たびたびの中座を、出陣のために取りかかっている準備があつて、亀山と連絡をとっていると受け取ることも出来た。

だがそれにしても、光秀の動作は落ち着きがなさすぎた。心がこの座にないような振る舞いがちらつくのである。連衆と談笑していて、相手がものを言い終わらないうちに、不意に立ち上がった。紹巴は高名な連歌師として、頻繁ひんぱんに織田家の武将たちにも招かれるが、光秀ほど日常の儀礼を大事にする武将を知らない。その日常からはみ出す動きが今夜の光秀の挙措の中にある。

光秀は部屋を出ると、暗い廊下を真っ直ぐ閑所まで歩いた。が、そこには入らないで手水てすいを使い、庭を向くと小さく咳払いをした。

「吉蔵が、到着しましてござります」

縁の下の闇で、低い声が言った。

「うむ、どう言っている」

光秀はせき込むように、闇に問いかけた。

「恐れながら、じかにお聞き取りを」

闇の中の声は、やはり低かった。

「吉蔵、いるか」

「は」

さっきの声とは違う張りのある若い声が返ってきた。光秀は、微かに笑い声が伝わってくる廊下の端の部屋のあたりに、ちらと眼を投げ、闇に沈むように廊下くろぞに蹲すまたった。

「ここへ来い。話せ」

「三七信孝様、惟住様これずみは今日安土を発たれ、摂津へ向かわれました」

「京には寄らなんだか」

「すでに通りぬけましてござります」

三七信孝を主将に、惟住五郎左衛門長秀を副将にするその軍団は、四国に向かっている。四

国の長宗我部元親を討つためだった。元親が信長に背いたのは理由がある。七年前元親が土佐から阿波に侵入したとき、信長はその働きを賞め、ついでに四国は手柄次第に切り取れといった。ところが、今年二月、甲州出陣のころになって、土佐、阿波二国以外はやれないと前言をひるがえ翻したのである。七年の間に、元親は阿波から伊予、讃岐まで大半を伐り従えている。信長を恐れて、勝手な食言に従うほど、元親はひ弱な武将ではない。無視した。

すでに元親討伐の先鋒、三好康長が、二月前に阿波の勝端に陣を敷いている。信孝、長秀の軍団は、すでに大坂、住吉、堺、岸和田に集結している兵を纏め、厚味を加えて海を渡る筈だった。

華やかな軍団の移動が、ちらと光秀の脳裏に浮かんで消えた。

「三位中将様（信忠）は、薬師寺町妙覚寺に、そのまま滞在でござります。動かれる様子は見えませぬ」

「……………」

「右府様（信長）は、明日四条本能寺に入られます」

「それは、確かだな？」

そう聞いたとき、光秀はその質問を長い間胸の中で温めてきた気がした。

「今日未の刻（午後二時）には、本能寺の木戸口に兵を配り、申の刻（午後四時）には青物の荷を運び入れました。明日入京、本能寺宿泊は間違いございませぬ」

光秀は眼を瞑った。

信長は、ほとんど裸で京に入ろうとしている。権力者は、いつも周囲に厚く兵を聚め、鎧のように武力的に空白地帯ともいべき場所に、身を置こうとしているようにみえた。

昔、近江の朝倉義景に寄食していたとき、光秀は鉄炮で一揆の部将を撃ちとめたことがある。義景が加州一揆と戦っていた時で、光秀は朝倉景行の陣場において、敵の夜襲を受けた。当時の一揆軍は、後年の蓆旗を立てた農民集団とは異なる。装備も武器も一流で、信仰心に支えられた粘りと団結力を持ち、戦い馴れしていた。強力な武装軍団だったのである。

その夜、深い闇の中から、朝倉軍を襲ってきた一揆軍も手強かった。混戦になる前に、光秀はすばやく陣場を脱け、篝火の光のおよばない場所に立つと、振り返って様子をみた。朝倉家における身分は客分であり、光秀自身まだ朝倉義景に仕える気持ちはない。戦場で軍功を獲て立身の足しにする立場とは無縁であった。

戦いは、立ち遅れた朝倉勢が立ち直って互角に変わった。打ち合う刃音、槍と槍がからむ音、槍の柄で鎧を敲く音、怒号と叫び声が夜気を震わせ、暗い地面が揺れた。しかし一揆軍は数が多かった。闇の中から、炎え上がる陣場の炎の光の中へ、刀槍を高くかざし、裂けるほど開いた口から、涸れ声をしばって飛び込んでくる敵影が続いた。地獄から獄卒の群れが湧き出てくるようだった。

一揆軍が、やや押し込んだと見えた頃、光秀は、敵方の後陣にいて、激しい身ぶりで馬の上

から采配を振っている部将を見た。鎧姿は黒かったが、乗っている馬が白いために、遠い火明りをうけて、敵將の姿が浮き上がってみえた。反射的に、光秀は左手に提げていた鉄炮を構えた。火繩を吹きながら、光秀は、銃口がその部將を把えたのを感じた。

瞑った眼の裏で、その時の部將坪坂伯耆ほうぎの姿と、信長の姿が重なった。

ほとんど酩酊に近い誘惑が、光秀を襲っている。そこに信長の運命が、暗い裂け目を見せているのを、光秀は覗き込んでいた。信長は、射程距離の中にいた。信長を呑みこもうとしている暗い亀裂の底に、光秀は己れ自身の死臭も嗅いでいる。

お主殺しである。その名分をふりかざして、四方から敵が殺到するだろう。叛軍の汚名を着て、一族はもとより三軍が亡ぶのである。だが、その迷いも、いま細作さいさくが闇の中に描き出してみせた裸の支配者を撃ちとめる好機の前に、ほとんど消えようとしていた。兵略の粹を尽くしても、こんな機会を作り出すことは出来まい。そう思うと、背筋に戦慄が走った。

光秀は眼を開いた。雨はやんでいるが、いつまた降り出すか解らない湿気を含んだ闇が、眼の前にあった。

かすれた声で、光秀はまた闇に問いかけた。

「徳川殿の動静はどうだ？」

二

「少し休むか」

清滝の谷間に降りると、紹巴は言つて、昌叱しょうしつの返事を待たずに道端の岩に腰をおろした。愛宕神社から下る坂道は、明け方に音がするほど降った雨に濡れて、滑りやすかった。肥っている紹巴は、長い降り道と、滑るまいとした氣遣いで、ぐったりと疲れきっている。

「はあ」と言つて昌叱は、だいぶ前を歩いている心前を呼んだが、溪流の音にまぎれて呼び声はとどかないらしく、心前は撫なで肩の背をみせながら、次第に遠くなつて行く。

「ま、いいよ。氣がつけば途中で待つているだろう」

紹巴は言つて、お前も坐れ、という身振りをした。試峠こころみから鳥居本の村落を抜けて化野あだしのへ出る道は遠い。ひと息入れる必要があつた。ひややかな風が谷間を流れ、忽ち汗がひくのが解つた。

紹巴は眼を挙げた。うす曇りの空だったが、空はぼんやりと日の明るみを宿している。雲は絶えず動いているらしく、時折り洗ったような日の光が谷間にふりそそぎ、両側に迫っている關葉樹の葉に残っている、透明な雨滴を光らせ、溪流のところどころ泡立つあたりを、白く照らし出した。

「月明けに、二条の御所に招かれていますか……」

昌叱は言いかけて、腰をおろしている岩の上で軀を振ゆって痰を吐いた。

「お集まりになるのは、どういう方々で？」

「まだ決まっていませんよ」

紹巴は不機嫌な声を出した。昌叱の無作法な所作が気にさわったのである。たとえ道端でも、師匠にものを言いかけて痰を吐くということがあるか、と思った。昌叱は固肥たぐまりで遅い骨組みの軀をし、髭を剃ったあとなど青々としている。連歌師にはみえない。句作の技倆も切れ味が鈍いところがあつて、紹巴は時々この遅しい四十男は、場所を間違えて連歌の席に坐っているか、と思うことがある。だが昌叱が、弟子の中で誰よりも連歌が好きで、心底打ち込んでいることを認めないわけにいかない。

そこまで考えてきて、紹巴はまたこの弟子の粗放な振る舞いを許す氣になった。

「惟任様は、もう龜山に着かれた頃でございますな」

昌叱が言った。それが突然だったので、紹巴は不意を打たれたように昌叱の顔を見もった。だが、見返した昌叱の眼には、何かを含んだいろは見えない。

「もうお着きだろう」

昌叱の陰翳いんえいのない眼に救われたように紹巴は言った。

「武者というものはせわしないものだ。しず心なく争いを追って走るが宿命というか、惟任様も今朝百韻を巻いておられたが、いま頃はもはや出陣の支度だろう」

紹巴はそれが癖で、ひとくさり感想を述べたが、昌叱の言葉で、昨夜から持ち越した漠然とした不安が、もう一度濃く胸を染めるのを感じた。

愛宕神社西ノ坊、威徳院で興行した連歌は、始まるのが遅かったために、深更に一巡して休み、仮寝のあと明け方からそのあとを続けて、辰の刻（午前八時）に九吟百韻を巻き終わった。発句は、光秀の、

「時は今あめが下しる五月哉」

であった。脇は威徳院の行祐が、

「水上まさる庭の夏山」

とつけた。第三句を起こそうとしながら、紹巴に一瞬のためらいがあった。第三句は行祐の付句を受けながら、他に転じなければならぬ。だが、紹巴の気持ちは、光秀の発句に向いていた。そういう心の働きを強いるものが、発句にある。品もあり、季語、切字を備えて、調子の高い発句だった。

だが紹巴は、その句を強すぎると思った。発句は普通静かに滑り出すのが常である。それは後に続く何十句かの付句を想定した、連歌衆への気遣いのようなものだった。前句を受けて呼びかけ、それに答えながら、新しい句境の立ち上がりをする。そうした細かな気遣いの間に、思いがけない展開が現われ、座は熱を帯び、疲れを忘れて、帯を織り上げるように一巻の句集を巻くのである。

光秀の発句は、そういう意味で孤立していた。連歌興行の席に明るく、また織田家の武将の中でも、もっとも洗練された社交性を身につけている光秀に似つかわしくない発句の立て方だった。

光秀は、志を述べたのでないか、と紹巴はふと思った。そう解釈すると、発句の張りつめた調子が、ごく自然に腑に落ちた。同時に紹巴は、凶々しい戦慄が胸を掠めて走ったのを感じた。京の一部で根強く囁かれている、右府どの、惟任どの不仲、の噂を、俄かに身近に風が吹くように感じたのである。

いまにも光秀が叛くような言い方を耳にしたこともある。だがそういう噂に對して、紹巴は慎重だった。織田家の多くの武将に出入りし、口軽い堂上方にも出入りしている身分である。滅多なことを口走れば、身の破滅をよぶことは明らかだった。噂は聞き流してきた。だが、聞き流したことは、噂の深刻さを理解しなかったことではない。織田右府という人の性格、惟任日向守という武将の性格を考えると、むしろ紹巴は、噂をあり得ることとして感じている。感じはしたが、強いて眼をそむけてきたとも言える。所詮武辺のことは、風流の徒に関わりないことという、そっけない考えもあり、また臆病だったからでもある。

だが、光秀の発句が一種の決意を述べたようなものだとする、と、紹巴は思いがけなく噂の真実を証しする場に立ち会わされたようだった。咄嗟に紹巴は、発句の強い性格を打ち消すしかないと思った。